笠懸野

学校教育目標

主体的な学び・豊かな感性・健康な心身

みどり市立笠懸中学校学校通信

優秀作文特集号　令和元年 11 月 1 日発行

http://www.midori-school.ed.jp/kasachu/

〒379-2313 みどり市笠懸町鹿 362 番地 1

TEL0277-76-2011　FAX0277-76-2806

作文の入選作品を紹介します

本校の生徒が、関係機関等でのコンクール等に出品し、素晴らしい評価を受けています。学校で表彰を行い、集会の機会に生徒に紹介していますが、保護者の方や地域のみなさんに紹介する機会がなかなかありませんので、ここにその作品を紹介します。ぜひご一読ください。

令和元年度全国中学生人権作文コンテスト 群馬県桐生地区大会
最優秀賞　誰もが共存できる社会に　２年　大向　悠斗

僕は、小学校の道徳で人権の意味を知りました。人権とは、人間が生まれながら持っている、生命･自由･平等などに関する権利のことです。どうして、何度も何度も繰り返して人権学習をするのでしょうか。それは、いじめや差別などをしてはいけないことを、子供たちに学習を通して考えさせるためだと思います。さらに、誰にでも優しくできるようになってほしいという願いが込められていると思います。しかし、現実には体に障がいを持っている人や病気の人を心のどこかで「なんか変だな。」「かわいそう。」と無意識に思っている人がいると思います。これは心のどこかで相手を自分より下に見ていて馬鹿にしているからだと思います。

以前、僕の学校に聴覚障害の方が講演に来てくださいました。この方は手話を使って生活の大変なところを説明してくれました。たとえば、誰かが家に来てチャイムを鳴らした時にわかるように、チャイムがランプと連動して、ランプが光るようになっています。そのほかにも、お湯を沸かす時にタイマーを使うなどの工夫をしていました。いろいろと生活に支障が出て大変そうに思えたけど、笑顔で話しているのを見ると、たとえ「聴覚」という大事なものを失ったとしても前向きに頑張って生きているのが伝わってきました。

僕の身の回りにも障がい者の人が暮らしやすい工夫がたくさんあることがわかりました。僕がこの前東京に行った時、新宿駅のホームに向かう階段の所に車椅子が階段を上るための器具が設置してありました。しかし、障がい者の人が暮らしやすくなるためには、普段僕たちが何気なく使っているところを改善する必要があると思います。その中でも段差がある所や、入り口が狭い所を広げるだけで誰もがよりいっそう暮らしやすくなると思うので、全国に広がってほしいです。

僕の住んでいるみどり市には、事故で首から下が動かなくなった星野富弘さんがいます。富弘さんは、中学校の体育教師になって、わずか数ヶ月後にクラブ活動の指導中に落下事故を起こし頸椎を負傷し、手足の自由を失ってしまいました。体育教師になるくらい体を動かすのが好きだった富弘さんにとって、首から下が動かなくなった深い悲しみや絶望感は僕には想像できません。絶望の底を経験した富弘さんが描く詩画には、優しさがあり、人の心をあたたかくする力があります。富弘さんのように、どんな困難にぶつかってもたくましく生きる力に、僕は勇気をもらいました。

障がいがあっても、僕たちに感動を与えてくれる人や、耳が聞こえなくても、笑顔で前向きに生きてる人たちは、一人一人の素晴らしい個性を持っている人と思います。障がいがあるから「かわいそう」「大変そう」と思ってしまいますが、病気や障がいといったハンデを負っている人たちとの間に線を引かないようにしたいです。同じ人間として、共に生きる人として、困っている人がいたら手をさしのべたいです。

恵まれすぎている今の時代、何一つ当たり前などないことを改めて確認し、元気に生活できることに日々感謝しながら生活していきたいです。そして、これからの未来を生きるすべての人たちにとって、明るく、幸せな未来になってほしいです。

桐生人権擁護委員協議会長賞

世界が平和であるために　２年　鹿木　太智

僕は、夏休みに広島の原爆ドームと広島平和記念資料館に行った。そこで、今まで見たことのない光景を目の当たりにして、衝撃を受けた。1945 年 8 月 8 日午前 8 時 15 分、アメリカ軍は広島市に人類史上初めての核兵器「リトルボーイ」を実戦で使用した。この核兵器で広島市全体が一瞬にして滅びた。そして、市民の未来も無残にも奪われた。資料館には当時の人々の無念、思いがたくさん展示されていた。火傷で全身の皮がむけて亡くなったお母さんの上に抱きつく子供の写真や、「水がほしい」と泣き叫んでいた 2 歳の子供にお母さんが水をあげようとしたら、医者に飲ませたら死ぬといわれ飲ませなかった。そして 3 日後に子供が亡くなり、「飲ませてあげればよかった。」と、ひどく後悔をしたお母さんなど、数え切れないほどの悲しい思いがそこにはあり、とても心が痛くなった。そして、とてつもない後遺症を負った人もたくさんいた。ある七歳の弟と11 歳の姉は後遺症が残り、弟は3年後、姉は16年後に亡くなった。この二人はいつ死ぬかわからない後遺症に不安な日々を送っていたのだろう。

一発の、たった一発の原子爆弾が、無差別に何も悪いことをしていない多くの人達の命を奪い、生き残った人々の人生も変えた。そして、原爆死没者慰霊碑には、被爆者の訴えへの答えとして、「安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませんから。」と刻まれていた。これは、「全人類の共存と繁栄を願い、真の世界平和の実現を祈念するヒロシマの心」を表しているそうだ。

僕は、真の世界平和を実現するには何が必要で、何が無くなればいいのかを考えた。しかし、世界平和の実現となると、今の僕にはまだ知識も経験も少ない。そこで、現実的なことに着目してみた。「いじめ」だ。いじめは報告があるだけで、年間約 32 万件以上報告しているそうだ。2016年の統計によると、全国で自殺者は 21,197 人。その中で、小中校生の自殺者は増加していて、320 人いたそうだ。これは決して他人事とではない。320 人ということは、2 日に 1 人が自殺していることになるのだ。いじめを受けている人は想像をはるかに超えたつらい思いをしているだろう。また、いじめをしている張本人でなくても、見て見ぬふりをすることもいじめをしていることと同じ事になる。もし自分がいじめられていて、助けてもらえなかった時、笑われた時、どんな気持ちになるだろうか。絶望感しかないだろう。そうやって、自分に置き換えてみると、相手の気持ちがわかってくる。しかし、人間という動物は自分と違う人種や考え方をなかなか受け入れられない。自分が正しいと無意識に思ってしまうのだ。

いじめは子供の世界だけではない。どこでも起こりうることだという。肌の色、見た目、話し方、自分や自分の周りの人とちょっとでも違うという所から、差別やいじめが始まる。自分と違う他人

を受け入れる、もしくは受け流すことが大事だと思う。

そして、必要だと思うことは「思いやり」だ。「思いやり」とは他人の心情や身の上などに心を配ることやその気持ちのことを指す。自分に余裕がないと自己中心的になってしまい、周りの人を傷つけることもある。一人一人が思いやりを持つことで他人を自分に置き換えて考えることができ、人を救うこともできて、いじめをなくすことも不可能ではないはずだ。思いやりのある人になりたいと思うならば、相手の様子をしっかり観察し、相手の気持ちになってよく考えることが重要だ。この「思いやり」を世界中の人々が持っていたら、優しい世の中になるのではないかと僕は思う。

最後に、僕は世界が平和で笑顔あふれるところになってほしい。そのためには。一人一人が「思いやり」を持って生きることが大切だ。たとえば、困っている人がいたら声をかけたり、悩んでいる友達がいたら相談に乗ってあげたり、小さなことでもいい。一人でも笑顔に、一人でも多く楽しいと思える人生になるように、その気持ちを持って生きていける世の中であってほしい。それが世界平和につながることだと僕は信じている。

優秀賞　助け合い　　２年　牧野　涼佑

７月３日に、京王八王子駅前の道で、点字ブロックの上を歩いていた全盲の男の人が通行人とぶつかり、杖が壊れたというニュースを見ました。そして杖を拾おうとしたら、男の声で「目が見えないのに一人で歩くな。」と言われ、右足を蹴られたそうです。全盲の男の人の話では、ぶつかった時にスマートフォンが落ちたような音がしたようです。歩きスマホをしていてぶつかったのかもしれないと言う事です。歩きスマホをしていたのか、していなかったのかは、全盲の人ははっきりわからなかったと思いますが、人にぶつかったらまず「すみません。」と言う言葉が出ると思うのに、文句を言ったと言う事に僕はびっくりしました。僕は全盲の人は、一つも悪くないと思います。点字ブロックと杖を頼りながら歩いてたようなので、悪いのは、ぶつかってきた人です。調べてみたら、点字ブロックの上を健常者が歩くのは違反です。荷物を置くのも、視覚障がい者の人が歩くのを邪魔をすることになるので違反になるようです。ぶつかってきた人は、違反だらけだと思います。歩きスマホは相手にけがをさせることがあるけど、自分もけがをすることがあると思います。つまづいて転んでしまったり、工事している道では穴が開いてたりします。穴に落ちたりしたら大けがをしてしまうと思います。ぶつかってきた人は、足を蹴ったり、ひどい言葉を言ったり、心と体を傷つけたと思います。僕は、そういう大人になりたくないです。視覚障害者の人だけではなく、いろいろな障がいを持っている人がいると思います。僕は障がい者の人が困っていたら、言葉と行動で助けたいと思います。お年寄りにも優しい言葉をかけたいと思います。自分にできる簡単なことから助けていきたいと思います。

全盲のピアニスト、辻井伸行さんという人がいます。アメリカで開催されたピアノのコンクールで優勝しました。僕はすごいなあと思いました。全盲と言う事は全く見えないことなので、ピアノを弾くことは、僕には無理なことだと思っていました。でも優勝できるほどピアノをうまく弾くことができるなんて驚きました。僕なら最初から「無理だろう。」とあきらめていたと思います。全盲だから、あれも出来ない、これも出来ないと、何も挑戦しなかったと思います。そして親もたぶん何もさせなかったと思います。でも辻井さんのことを知って、挑戦する気持ちがあれば無理なことはあまりないのではないかと思いました。だから杖を壊された人が言われた「目が見えないのに歩くな。」は間違っていると思うし、そういう傷つく言葉を言うこと自体がおかしいと思います。今は町のあちこちや駅

でバリアフリーの設備を多く目にします。エレベーターの中にも点字表示があったり、頑張ろうとしている人に頑張ってもらえるように、社会がいろいろ取り組んでいると思います。たぶん、視覚障がい者の人や、ほかの障がいを持っている人は、出来るだけ普通の生活をしたいともいます。ただやっぱり、それには人助けが必要だと思います。実際に僕はどこまで人助けが出来るかわからないけど、まずは声掛けをしていきたいと思います。そうじゃないと困った人は困ったまま何も出来ないからです。一人一人が自分の出来る範囲で、出来ることをしていくことが僕は大切だと思います。助け合うことで自分と周りの人の絆を深めていけるような気がします。自分一人ではこの世の中、生きていけません。そして助けられた人は必ず「ありがとう」と言う言葉を言えるようになってもらいたいです。この言葉を言えないと、ただの助けた、助けられたで終わってしまいます。大切なのは「助け合う」事です。お互いに助け合うことが出来る「ありがとう」ということばが自然に出るように、みんなが心がけてほしいと思います。

そして、最初から大きな事ではなく、小さな事からチャレンジしていきたいと思います。

みどり市父の日大会作文　優秀賞　　私の家の大黒柱　　木村　菜穂

私の家族は、五人と一匹。父、母、私、妹二人、それと犬である一歳のうちの犬、チャコに一番嫌われているのは父である。少なくとも今までに二回かまれているのだ。それもそのはず。私の父はすぐ怒る。それはチャコのしつけのためだとわかっている。けれど、言い方といい、やり方といい、私も納得いかない点はある。私にもそういう点があるということは、きっとチャコも嫌がっているはず。もっと家族の心をよんでほしいなと思うところはある。

そんな父だが、私が起床した時間にはもうすでに出勤していて、私が就寝する時間になっても帰ってこないのである。なので、まともに会うことができるのは、休みの日ぐらいである。けれど、部活で練習試合が入るので、話したり、一緒にご飯食べたりできるのは、一週間のうち一日ぐらいしかない。毎日夜遅くまで働く、どこにでもいる普通の会社員の父。父にとって休みは貴重であるのに、家族の時間を第一に考えてくれる。出かける時は、ペットと一緒に行けるところをインターネットで調べて、プランを立ててくれ、最初から最後まで家族をのせて安全な運転の元、帰ってくることができる。今年の春夏もたくさんのところに連れていってもらって、たくさんの思い出をつくった。思い出となって、楽しい旅行だったと思い返すことができるのは、計画性が強く、なんだかんだ旅行好きである父のおかげだ。

幼い頃は、たくさん悪いことして、たくさん怒られた。時には、押し入れに入れられたこともあった。でも、そんな私が中学二年生になった。そして怒られなくなった。ここまで変われたのは、あのとき、父が厳しく一生懸命私のことを思って叱ってくれたからであろう。最近、今まで父に怒られたことはすべて意味のあるものだと感じるようになった。今では、こんなこともよき思い出なのかもしれない。

私が、父の理想とする娘になれたかはわからない。けれど、私には父と母の両親がいて、妹が二人いる。そして、チャコもいる。友達もたくさんいて、毎日充実している。学校に行けるのも父のおかげ。思ったよりも父のおかげで楽しく生きていられることを知った。父にイラついたり、気にくわなかったりするけれど、数えられないほど感動している。でも、まずいいたいのは、「母に出会ってくれてありがとう」だ。

そして今、私は胸を張って、「父と母の娘でよかった」と思うことができる。